

名勝玄宮楽々園発掘調査 現地説明会資料

平成 20 年 3 月 1 日 (土)

彦根市教育委員会

彦根市教育委員会では平成 17 年度より、名勝玄宮楽々園にある楽々園の保存整備事業を進めております。今年度はその 3 年目にあたり、その事業の一環として平成 19 年 10 月 9 日より発掘調査を行っております。調査対象地は、井伊家の下屋敷である槻御殿の建物部分(楽々園)で、その広大な敷地内でも御書院の南側一帯、文化 15 年(1818)の絵図「槻御殿御絵図」などより能舞台や坪庭などの遺構が推定される場所です。

今回の調査の結果、楽々園が最大規模となった 11 代藩主井伊直中が隠居に際して築造したと考えられる遺構が多数確認されました。

1. 発掘調査の概要

(1) 遺跡名：特別史跡彦根城跡(名勝玄宮楽々園)

(2) 所在地：彦根市金亀町

(3) 調査主体：彦根市教育委員会 文化財課

(4) 調査期間：平成 19 年(2007 年)10 月 9 日

～平成 20 年(2008 年)3 月 31 日(予定)

(5) 調査面積：約 1,200 m²

2. 遺跡の概要

楽々園は、玄宮園とともに彦根藩 4 代藩主直興により建立された彦根藩の下屋敷で、槻御殿と呼ばれていました。現在は建物部分を楽々園、庭園部分を玄宮園と呼び分けています。槻御殿の地は内堀と中堀間の第二郭、松原内湖に面した広大な干拓地でした。直興没後、楽々園の建物の規模は縮小傾向にありましたが、11 代藩主直中の隠居に際して大規模な増改築が行われ、その規模は楽々園の歴史の中で最大規模になりました。その後は、12 代藩主直亮によって、この下屋敷の呼称となる「楽々の間」などが新設されますが、再び縮小傾向に向かいます。最近では、明治 14 年(1881)から平成 6 年(1994)まで民間業者による旅館営業が行われており、その際にも建物が増築されました。

今回の調査地は楽々園の中でも限られた範囲でしかありませんが、直中隠居時の建物構成を描いたと考えられる文化 15 年(1818)の絵図「槻御殿御絵図」によると、調査範囲内には能舞台や坪庭、湯殿などの存在が想定される位置にあります。

3. 調査の成果

通常の発掘調査では、どのような遺構があるかは、実際に掘り下げてみないとなかなか

分からないというのが実情です。しかし、今回調査を行った楽々園は、坪庭や建物構成を描いた絵図が残っており、その絵図により、ある程度遺構を推定しながら調査を進めることができました。そして、実際に検出した遺構と絵図を照合することにより情報を整理しながら調査を進めることができました。

今回の調査対象地は、近年まで料理旅館として利用されていたため、その当時の建物の礎石が残ってありました。そこで、掘り下げる前に現況の測量調査を行い、絵図と照合しながら順次新しい礎石を除去し、地表面から約 20cm 掘り下げたところで絵図と合致する遺構面を確認しました。

【主な検出遺構】

能舞台（写真 3・4）

彦根藩の能舞台は、寛政 13 年（1801）11 代藩主直中の時に建立された表御殿が初例になります。次いで、文化 11 年（1814）楽々園に能舞台が建立されます。この時の藩主は 12 代の直亮でしたが、実際にそれを建てたのは、前藩主直中でした。彼は藩主を退く際、隠居後の生活の場として楽々園を大幅に増改築し、天保 2 年（1831）に死去するまでの 18 年間、この能舞台で演能を重ねてたようです。この能舞台は、天保 13 年（1842）までには「取解」（解体）かれており、建立から 30 年に満たない間に姿を消しました。その後、天保 3 年（1832）以降に、江戸上屋敷に彦根藩では最も新しい能舞台が建立されます。

以上が、彦根藩で建立された能舞台の歴史です。これら大名家の能舞台の多くは、江戸城本丸の能舞台を写す形で建立されました（図 1 参照）。その構造を概観すると、能舞台は大きく「舞台」「後座」「橋掛り」で構成されます。「舞台」は能を演じる所。「後座」は、「舞台」の奥にあり、笛や鼓をかなでる囃子方が並ぶ所。「橋掛り」は「後座」につづいて左斜め奥へ向かう長い廊下で、ここは単なる通路ではなくしばしば重要な演技が行われる場でもあります。今回の調査では、能舞台の舞台・後座・橋掛りの位置から、土を叩きしめることにより構築した巨大な枡状遺構を確認しました。その規模は、舞台と後座の下で幅 5.1m、奥行き現状で 5.7m、最深部 1m の断面逆台形、各角は隅丸に整えています。橋掛りの下も同様に幅 1.3m、全長 9.2m、最深部 0.5m の断面逆台形を呈し、各角を隅丸に整えています。このような枡状遺構は、過去に発掘調査の行われた表御殿の能舞台床下でも確認されています（写真 1・2 参照）。しかし、表御殿のそれは漆喰で構築したものであり、今回楽々園で確認したものは山土を強固に叩きしめることにより構築しており、その手法に変化がみられます。能舞台の床下には音響効果を高めるため、甕を据え付けるなどの工夫がなされますが、枡状遺構も同様な効果を高めるために構築されました。このように、彦根市内では能舞台の確認例が今回で 2 例目となります。どちらも遺構の残りは非常に良好で、全国的に、未だ能舞台の調査事例の少ない中で、非常に貴重な資料であると言えます。

坪庭（写真 5）

坪庭は、建物と建物との間、または建物と塀などに取り囲まれた狭い空間に造られた庭のことを言います。楽々園では、隠居した藩主のプライベート空間である奥向の御書院から見るために造られた坪庭（坪庭絵図「ろ」の位置）より、2つの池が確認されました。その中でも漆喰池の残存状況は良好で、長軸3m、短軸2m、最深部0.4mの楕円形を呈しており、底には甕と偏平な石が埋め込まれています。甕は金魚など鑑賞用小魚のための寝床、また水草の植込みの用途などが考えられます。

湯殿（写真6）

江戸時代の入浴施設には、別の場所から持ち込んだ湯につかる「湯殿」と、蒸気浴つまり現在のサウナに近い「風呂」などがありました。楽々園を描いた絵図を見ると3箇所に「湯殿」と記されており、その位置から長方形の漆喰遺構を検出しました。その形態は、いずれも中央に向かって下がるように傾斜を持たした漆喰貼りで、その中央部で長方形に孔が穿たれています。湯殿の床構造は中央に向かって水垂れ勾配を付けた板張で、その下に排水樋が取り付け、そこから床下に排水します（絵図1参照）。床下に排水された湯は、漆喰貼りを伝い中央の坑に集まり排水される仕組みとなっています。その規模は、奥向のそれで長辺3.5m、短辺3mの長方形を呈し、中央部の孔は長辺1.5m、短辺1mを測ります。表向のそれは2.5m四方で、中央の孔は長辺1.5m、短辺1.3mを測ります。

便槽（写真7）

便槽とは汲取式便所の糞尿を蓄える地下施設のことを言います。桶や甕、枡が設置されることが多いですが、今回は埋甕2基を確認しました。いずれの甕も、直径0.5mを測ります。共に、大使用であったことが絵図より判明します。

漆喰枡（写真8）

漆喰で造られた枡を3基確認しました。漆喰とは、山土・砂利・消石灰を混合し、そこにニガリ液などを加えて製作します。水を加えて練ると硬化する水硬性セメントとして古来より広く使用されてきたもので、江戸時代以降、井戸や池底、風呂などの水周り、便所や軒下の犬走りなど、現代のセメントに似た頻度で、各方面に多様に用いられました。今回確認した枡は平面長方形を呈していますが、その用途の解明は今後の課題です。

井戸（写真9）

能舞台の南側で、2基の円形の漆喰井戸を検出しました。いずれも直径は0.7m、厚さ0.07mで、土管状の漆喰製井筒を積み上げているものです。

上水遺構（写真10）

上水道は元枡に蓄えられた湧水の水圧により、樋と呼ばれる水道管で送られました。彦根城下での、楽々園までの上水道の流れは、外堀に面した油掛口門付近（現城東小学校西裏手）の元枡から木樋、石樋、瓦樋などを伝い、途中屈折点にいくつかの枡を設け、元枡の噴出水圧でサイフォンの原理を応用して楽々園まで給水し、ここから更に分岐し、楽々園内に導水していました。今回その分岐した水道管にあたる竹樋とそれを連結・方

向転換する樋駒を確認しました。残存長は1.2mを測り、竹樋と樋駒の接続部は、しっかり固定し水漏れを防ぐため粘土によって覆われています。樋駒の穴が上を向いていることより上部に導水したと考えられます。御殿内へ導入された水は、文政年間の「槻御殿・木御樋・石御樋・竹御樋絵図」によると、泉水・手洗・湯殿などに使用され、飲料水は井戸水が用いられていたようです。

【まとめ】

今回の調査では、楽々園に関連する遺構を数多く確認することができました。しかし、楽々園は、その歴史の中で幾度となく建物の移転・増改築を行っており、どの遺構がどの時代のものなのかということは、今後さらに検討していきます。現段階では、能舞台や坪庭、湯殿や便槽、そして検出されている礎石など多くの遺構が、文化15年(1818)の絵図「槻御殿御絵図」と合致し、楽々園が最大規模となった11代藩主直中隠居時に築造された遺構と考えられます。能舞台や坪庭など数多くの貴重な遺構を確認できた今回の調査成果は、今後、江戸時代の大名屋敷の在り方を検討していく上で良好な資料となるでしょう。

なお、現在進めております建造物などの保存整備に関しては、今回の発掘調査の結果を受け、有識者などとも協議を行い、保存活用の手法について、今後協議を行う予定です。

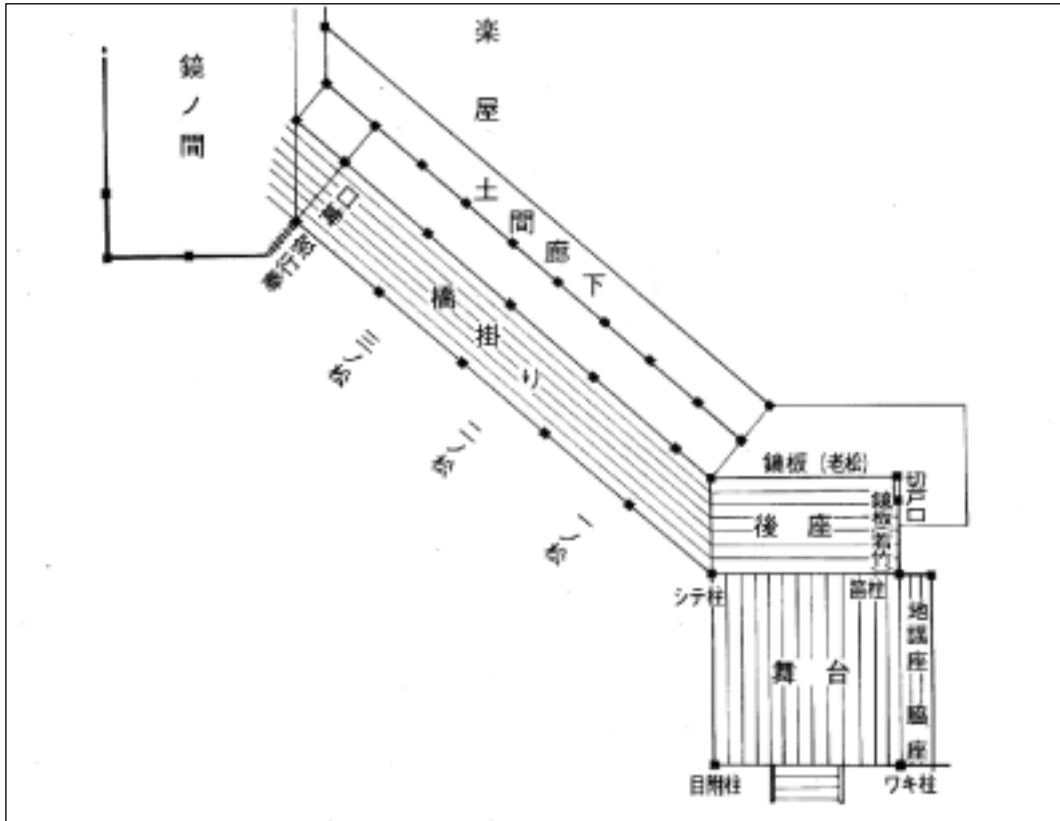


図1 江戸城本丸表舞台（山崎静太郎「能舞臺」より修正転写）



絵図1 上田道三氏が描いた埋木舎の湯殿



写真1 表御殿（現 彦根城博物館）の能舞台



写真2 表御殿（現 彦根城博物館）の能舞台下の漆喰枱



写真3 能舞台床下の桝状遺構



写真4 能舞台（橋掛りより舞台を望む）



写真5 坪庭で確認された漆喰池



写真6 湯殿床下の漆喰遺構



写真7 隣接する便槽



写真8 漆喰枡



写真9 円形漆喰井戸



写真10 上水遺構（竹樋と樋駒）